大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

家隆仮託書の検討：「和歌灌頂次第秘密抄」をめぐって

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2011-12-09
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 三輪, 正胤
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00006532

家隆仮託書の検討

——「和歌灌頂次第秘密抄」をめぐって——

三輪正胤

三 「和歌灌頂次第秘密抄」をめぐって及びまとめ

「和歌灌頂次第秘密抄」及び、その同系と考えられる書は、大略次のような内容をもっている。

一、和歌の歴史の事
a、八雲立の歌をめぐって三十一字の謂
b、浅香山の歌をめぐって
c、難波津の歌をめぐって六義論
二、八品の事
三、人丸・赤人の事
a、両人出現の事
b、和歌撰集の事
c、ほのぼのとの歌をめぐって
四、歌病の事(十二病)
五、五義の事(遍序題曲流)
六、三体の事
七、和歌と連歌の替りめ・当世の風体

右の内容をもつ諸本を整理してみると、内容の広略、引用歌の相違等を除いて考えても、次の二系統が考えられる。

第一類本
静嘉堂文庫a本、同b本、天理図書館本、祐徳神社文庫a本、岩瀬文庫a本、松平文庫本、彰考館文庫a本、同b本、蓬左文庫本、書陵部本、後藤重郎氏本

第二類本
尊敬閣文庫本、祐徳神社文庫b本、岩瀬文庫b本

右の二系統は更に分類できるが、それへの言及は、徒に煩瑣になる許りであるので、止めておく。

扨、右の二系統の相違は、大旨、次のようなものである。

一、その内題は、第一類本は「和歌灌頂次第秘密抄」として二位家隆撰とするが(但し、書陵部本、後藤本は「二位家隆口伝秘密抄」と称す)、第二類本は「和歌灌頂次第秘密抄」と称しながらも家

隆の名は記していない。

二、その巻末に、第一類本は家隆方一流相伝系図他をもつが、第二類本はもたない（但し、岩瀬文庫b本は巻末に脱落があり判断の資料とならない）。

右の二つの観点からは、静嘉堂文庫a本、彰考館文庫b本は第二類とすべきであるが、次に述べる観点から第一類とするのが妥当である。

三、その内容として、第二類本は第一類本にない次のような部分をもっている。以下の引用は、すべて尊敬閣文庫本による。

㋑、難波津の歌をめぐって六義論の六義伝来の箇処

〃或は羅什三蔵より天竺の乱文とてある六義を旨とする也それを道慈律師日本に伝て六義をあらはし侍ともいへり〃

㋺、同じく六義論で、六義を一首にこめる歌の箇処

〃柿本人丸歌に一首六義

ほのほのと明石の浦の朝霧に嶋かくれゆく舟をしそ思ふ

明石の浦の旅海路と見えたりこれに心ふかし海上旅の時に是雅の歌也裏には高市王子の事を読り是風なり名所ハ海路の別離哀傷かくのことく多首を一首によみ給ふ是ハ又賦の歌也娑婆を明石にたとへ迷土をは闇にたとふるによりて霧をいふ也王を船と云によりて舟を云也これをほむる義これ頌也〃

㋩、同じく六義論で六義の頌の説明の箇処

〃又さきくさとは唐の道州には水わるくて人これをのめば死す然に桧を水に立れは寿命長しかれは彼国には幸種といふ也さいはひのたねと云心也〃

㋥、人丸・赤人出現の事で人丸についての箇処で、第一類本では人丸は出雲国より出現すると云うに対し、石見国戸田郡よりとし、一説として出雲国をあげ、更に次のように述べている。

〃或は大和国豊国より出現とも云豊国とは今の安部寺也

一山田人丸　是は正四位下也文武天皇御時人也

二忍海人丸　是ハ位不知仁徳天皇御時人也

三玉手人丸　是は従五位上光仁天皇御時人也

四柿本人丸　後也柿本人丸三代御門の時の人なりといへり唐にての哥と云に

あまとふやかりのつかひのたよりあらはならの都にことつてやせむ

是は秘注に見えたり〃

㋭、右の箇処に続いて、吉野山の桜を雲と見、立田山の紅葉を錦と見るという箇処

〃又このもみちを錦と御覧しけると云歌をある物には文武と云説もあり或は聖武とも申めり是は古今序注云聖武御門養老六年に即位ありて七年の十月に竜田河に行幸ありて此時の御製に君の御作と云義也

竜田河もみちみたれてなかるめりわたらはにしきなかやたえ南

人丸哥に吉野山のさくらを雲かとなむみゆると云哥は左右なく人にしらせぬ哥也努々他人にみすへからす大相伝

散は雪ちらぬは雲と見ゆるかなよしの野ゝ山の花のよそめは〃

(ヘ)、赤人出現の箇処

〃ある説には大和国山辺に住ける人と云聖武御門御時に上総国山辺よりのほるといふ委別紙にあり〃

(ト)、歌病論に続く秘伝とすべき言の箇処で〃能々師を貴敬してうくへし〃に続く

〃師匠をかろくすれは師息といひ神秘といひ罰をあたる殊に天竺の梵語をまなふ神託によてこれをなすかたかたわろくしては罰を蒙侍あひたいかにもよき師匠を尋て請へきなり然に年々三十一字をつらぬると心得たるはかりにて習はすしらすしてこれを読ゆへに罰を蒙事侍るこれ道の魔性といひつへき也先にもいふことくに我朝の御法なりよく心得てよみぬれは神仏のあはれみをかふりて魔縁もしりそき利生うたかひなし〃

(チ)、五義の事の最後に続く箇処

〃題をかくのことくよますとも又初よりも其事を五七五の所にをかねとも一すかたなるへしたとへは本哥云

五月雨やふるの高橋水こえて浪はかりこそ立わたりけれ

これは五月雨やふるといふをすなはち高橋といふ時はふると云は五月雨の義也それにふる高橋とは名所也それに水こえてとは五月雨のわさなり水といひて浪と云は橋をこえたる義なるへし浪はかりこそたちわたりけれと云は橋にわたるといふ事侍は浪の立わたるをも又橋をわたる義も同し縁の詞也これ大和国の布留の高橋の事なるへし加様に又よみたるは尤哥のすかたなるへし五月雨やといふやのこゑはあいうゑをのあにかよふふるの高橋はふハうにかよふあとうと同音也又橋のしいにかよふ水のみはこれもいにかよふいつれもいのこゑ也こえてのてはゑにかよふ浪のなはあにかよふあいうゑにかよふこそのそはをにかよふ又たち渡りけれはのたはあにかよふをとあと同し音也五七五七々の音のひゝきといひ通するをもて哥の本意とせりこれ梵語の義也是即天竺にては梵語大唐にては詩の義日本にては和哥の本意なり〃

(リ)、三体の事の最後の箇処

〃此外十体とてあり八雲抄なとに委させたり彼を見るへし〃

(但し、八雲抄の名は、祐徳神社文庫b本、岩瀬文庫b本は竹苑抄とある)

(ヌ)、最後に跋文が続く

〃新古今の比藤原有家朝臣藤原定家朝臣藤原家隆朝臣藤原雅経朝臣奉勅和哥の肝要をとて此抄を集住吉に籠給ひて却て不能外見抄也〃

祐徳神社文庫b本は次のようである。

〃右此抄ハ新古今比宗匠定家家隆雅経とて御座此中定家ハ二条流とて昔より相続家隆は六条流とて定家俊成の弟子たりし共六条院とて哥もすこしかハりめ有然は此四人肝要を取て此抄集給ふ所也よろしき外見にあたハさる抄なり奉住吉に四人判形を加て籠給へり此外あるへからす其箱に入て報して籠給へりと云々相構此事不可有他見者なり家に此抄を伝而人判形を加てはしはしに以勅筆を加此詞を云々

知流輪雪知羅怒王九裳登身遊留賀那吉野能屋満之花之余所目波
云々　年□月日〃

以上のような次第であるが、その特質の一・二の観点からは、明らかに、第一類本は家隆系のものである事が判る。これに対し第二類本は、その性格を非常に曖昧にしている。そこで、かゝる曖昧さは、三の観点で列記した㋑から㋦までのものにおいて、何らかの意味づけ或いは方向づけがされるのではないかと云う淡い期待が沸く。その検討を以下に続けていく事にしよう。

㋑について

この説は、所謂和哥三国伝来の事で、伝統的な古今集の注においては、為顕流の人、能基の「古今和歌集序聞書」に於いて始めて記され、以下、この系列の「古今集注」に記されてかなり特長的なものである（註一）。

㋺について

この説は、一首に六義を詠みこんだものとしてのものである。このように一首に六義を詠みこむ事は為顕流においての秘伝である（註二）。為顕流の書「玉伝深秘」の一部が独立し若干増補された「人丸秘密抄」（註三）となった書の中では、次のように述べられている。

ほのほのと明石の浦の朝霧に嶋かくれ行船おしそおもふ

海上の旅と見へたるは別の事なし、是ハ雅なり、裏には高市の王子の事をよめり、是ハ風の哥なり、名所海路別離哀傷ハかくのことく多数を一首によむ賦の哥なり、船を渡すに王の世をわたる事をたとふるハ比哥なり、沙婆はあきらかにあるによりて明石の浦にたとゑ、冥途ハくらきによりて霧にたとふるは興なり、王の世を渡すといふを舟といふハ頌なり、賢王を船にたとふ、愚王をハたとへす、されハ王をほむる心ハ頌哥なり、是を一首に六義を具すといふなり、これによりて旨を哥といふなり（東北大学図書館本による。以下同じ。）

これハ先の「和歌灌頂次第秘密抄」に述べられたものと正に一致している。これにより㋺は、為顕流の秘伝の一である事は認められるであろう（註四）。

猶、この説は他流に影響するところが多く、例えば、為顕流の説に殊に異をたてる「古今和歌灌頂口伝」（註五）では、次のような説になっている。

凡六義と云ハ哥の六の心なれハ一首にハあるへからす、されとも今の哥にハ六義有りと相伝する也、其故ハ哥面ハ赤石のうらの景気をよめとも、下心ハ哀傷の心をそへてよみ給へるハ風の心也、十善の御門も無常をまぬかれ給ハすして如此死給へハ、我等も無常をのかれかたしと理を尽してよミ給ハ賦の心也、次朝霧と云は、御門を朝とたくらへタル也、これハ比のうた也、帝を舟にたとへてよめるハ興のうた也、文武天皇も限あれハ生死ニをかされ給とたゝちによめるハ雅哥也、帝徳いミしく御座せとも死給と神明に告たるハ頌、洋々として耳ニ満る心也、一首ニ六義をよめることハ此うたの外ハあるへからさる也（引用は静嘉堂文庫本に

よる）

ここに見られる六義の説明（そへてよむは風、理を尽してよむは賦、たくらへたるは比、たとへてよめるは興、たたちによむは雅、神明に告たるは頌）は、為顕流の六義論の影響なしには考えられないのに（註六）、〃ほのぼのと〃の歌への援用には、先の「人丸秘密抄」とは違っているのである。

㋩について

この説は、為顕流の書「竹園抄」の六義論の項で記され、毘沙門堂本「古今集注」にも記されているものである。

㋥について

人丸出現の場所を石見国戸田郡とする説は、先の「人丸秘密抄」では〃自性論灌頂〃の部に「玉伝深秘」では〃人丸出所縁起〃の部に見え、能基の「古今和歌集序聞書」にも同じく見える。又、大和国豊国出現説は、同じく能基の「古今和歌集序聞書」に〃別ニ口伝アリ〃として記されている。

次に、四人の人丸を掲げる説は、先の「人丸秘密抄」の〃四人の人丸の事〃に次のように記されている。

一人ハ田中人丸、山田王子也、哥人にあらす、四位左中弁なり、
文武天皇の時代の人なり
一人ハ玉手人丸なり
一人ハ柿下人丸、春宮大夫の化人也、世に明る人丸是なり
一人ハ柿本人丸也、是ハ本ハ仲原清主といひけるをあまりに昔の人丸に似たりとて平城天皇の始の名をあらためさせて柿本人丸とハ号せしなり（以下略）

これに対し「玉伝深秘」の〃四名儀〃の部には、次のように記されている。

一、田口人丸、此人ハ孝謙天皇御宇人也、五品田口光人か子也、任公部大輔、哥人也
一、山田人丸、此人ハ山田主カ子也、文武天皇御宇人也、従四位左少弁、非哥人也
一、柿本人丸、化人、文武天皇御宇出現、春宮大夫
一、柿本人丸、此人ハ本ハ仲原清主と云けるを、余に昔の人丸に似たりける程に、平城天皇姓名を改、号柿本人丸（以下略、名古屋大学図書館本による）

以上二説と、先の「和歌灌頂次第秘密抄」の説のそれぞれは、相互に喰違いを見せており同一のものとは云いえない。しかし、四人の中、二人までは同じであり、その発想にも類似性がみられる事から、同系統の秘伝であったと考えてよいのではなかろうか（註七）。この発想の類似性という点からは、同じく為顕流の書「和歌古今灌頂巻」にも、四人の人丸の出現を説いている。この書は、後にも触れるが、為顕流の灌頂伝授を説いた基本書と考えられ、そこに四人の人丸出現の事が説かれている事は、右の推定を、かなり裏付けしてくれるものと考えられる。

㋭について

聖武天皇行幸として古今序注の説を掲げるが、これは能基の「古今和歌集序聞」の次のような説に全く一致するものである。

聖武の御門、養老六年に御即位有、七年の十月に行幸あり、此時の御歌に

竜田川紅葉乱て流るめり　とあそハしける御哥の事也（東大図書館本による。以下同じ）

続いて「和歌灌頂次第秘密抄」には人丸の吉野山の桜を雲かとみたという歌についての秘伝の記述があるが、これは「古今和歌集序聞書」には記されていない。

しかるに、先の「人丸秘密抄」「玉伝深秘」に人丸秘哥として次の歌が記されている。

ちるハ雪ちらぬハ雲と見ゆるかな吉野々の山の花のよそめハ

此哥ハ人丸の枕箱と云物に有（「玉伝深秘」による）

「和歌灌頂次第秘密抄」において〃大相伝〃として記された歌は、正にこの歌に外ならない。猶、この歌は毘沙門堂本「古今集注」にも記されている。

以上により㋭の説は、為顕流の秘伝であったと云ってよいであろう。

㋬について

赤人の出現については、能基の「古今和歌集序聞書」にある次の記事が全く一致する。

山のへの赤人と云人ありとハ、是ハ或人ハ大和国山辺の辺んに住ける人と云フ、実には不可然、上総国山辺郡より聖武御時始て上る人也、其親誰と不知

この記事の支えになり、又「和歌灌頂次第秘密抄」に〃委別紙にあり〃と云うのは「玉伝深秘」にある〃赤人出所縁起〃の事であろう。そこでは、最初に、大和国山辺の里の化人が赤人であるとしながらも、後に上総国山辺郡の化人が赤人であると説いているのである。

㋣について

これは秘伝を重要視すべき事を説いたまでのものである。

㋠について

この説の前半は〃五月雨や〃の歌が、縁の詞で続けられた優れた歌として説かれたものと理解できる。このように説く方法は、為顕の「竹園抄」に反撥する何人かによって（恐らく為実か）「竹園抄」が改変された「調引袖宝集」の中にみられる事は既に述べた（註八）。又、為顕流と対立する為世流の何人かによって作られたと思われる「悦目抄」の中にも、この説は見られる。この二例からすると、「和歌灌頂次第秘密抄」のこの前半の部分は、為顕流とは相対立する流派の説であったと思われる。

ところが、その後半の部分は、前稿で述べた「新選帝説集」の奥書で為顕流の重要秘伝とされた八相通を述べたものと推定されるのである。

即ち〃高橋〃の〃し〃と〃水〃の〃み〃はイの音によって相通じている。これは、アイウエオの五音何れにも起る現象であるから、全部で五相通になる。

次に、〃五月雨や〃の〃や〃と〃ふる〃の〃ふ〃は、ア音とウ音とで相通ずると云う。云いかえれば、アイウの三音の中、中のイ音

を一音飛びこえて通ずると云う事である。これで一相通である。

次に、〝こえて〟の〝て〟と〝浪〟の〝な〟は、エ音とア音とで相通ずると云う。云いかえれば、アイウエの四音の中、中のイ音、ウ音の二音を飛びこえて通ずると云う事である。これで一相通である。

次に、〝こそ〟の〝そ〟と〝たち渡り〟の〝た〟は、オ音とア音とで相通ずると云う。云いかえれば、アイウエオの五音の中、中のイ音、ウ音、エ音の三音を飛びこえて通ずると云う事である。これで一相通である。

以上、この三相通に先の五相通を加えると八相通になるのである。

こうしてみると、為顕流に対する流派では〝五月雨〟の歌は、五句の切れが、縁語で続く秀歌としたのに対し、為顕流では、五句の切れを縁語のみならず、音の相通によってつながるとした秀歌として説いたのである。このように詞と音の二つでもって歌の句の切れ続きを問題にする精神こそ、「竹園抄」の親句疎句事の論を支える基本であると云えよう。

以上によって㋠の説も、為顕流の秘伝であると考えられるのである。

㋷について

十体を説く書として「竹園抄」を掲げる祐徳神社文庫本、岩瀬文庫本の記述は正に正しい。「竹園抄」はその第十一風体之事の条で歌の十の姿を説いているからである。

ところが、尊敬閣文庫本の記述になる「八雲抄」という事になると問題が残る。即ち、「八雲抄」が現存の「八雲御抄」を指すとすると、「八雲御抄」中には僅かに〝近比も歌の十体とて品々をたてたる物ありき云々〟との記述がある許りで十体については説いていないからである。

ところで「竹園抄」の諸伝本中の一系統（伝為実本、松平文庫一本等二十本）は、その巻頭に〝八雲抄中より集めたる也〟と記しているのである。この事は「竹園抄」の論はすべて「八雲抄」に包含されている事を意味する。もしそうだとすると、尊敬閣文庫本「和歌灌頂次第秘密抄」の記述も正に正しい事になる。

しかし、右の事を積極的に否定する資料も、又、肯定する資料も今のところ見つかっていない。問題を猶、後に残しておきたい。

㋦について

四人の宗匠により此抄が作られたと語られており、此抄が権威あり由緒正しいものである事が知られる。そして祐徳神社文庫本によれば、更に、家隆は定家の弟子である事が知られ、跋文の最後の歌は、先の㋭の処で述べた人丸秘哥である事が知られ、前稿で述べた「古今和歌集序聞書」の為顕流の意気高き様相に通ずるものが感じられる。

さて以上が「和歌灌頂次第秘密抄」の第二類本における内容の検討である。

その検討の過程で若干の問題は残したものの、㋑から㋦までの項

目は、正に為顕流の秘伝そのもの、又は、為顕流を強く指向する内容をもつものと断定してよいであろう。

そうすれば、「和歌灌頂次第秘密抄」の第一類本は家隆流の、第二類本は為顕流のものとしてよいであろう。

ところで、この前提に立つと、前稿において考えた両派の影響関係、即ち為顕流の書が家隆流の手によって作りかえられたという事とは、齟齬しないであろうか。

そこで第一類本の内容を為顕流の諸書の中で探ってみるに、関連ありと認定できるものは少しも発見されない。

つまり、第一類本には為顕流の手が入っていないのである。

この眼で再び第二類本を眺めてみると、その㋑から㋦までの項目は、第一類本の各項の最後に単純に付け加えられたものであり、㋣の言は、それらが秘伝として重要であるとしているものと解釈できる事に気がつく。

つまりこの事は、本来、家隆流の書であった「和歌灌頂次第秘密抄」に、為顕流の秘伝が付加されたものが第二類本の型であるという事にならないであろうか。

もしそうだとすると、前稿において触れた「新選帝説集」の奥書が再び問題になってくる。

そこには、為顕流の秘伝である仮名の清濁・形体の六義・九章の純然・八相通等の中、形の六義と八相通の二の秘伝を家隆流の懇望甚しきが故に伝授したという記事があった。

この記事を基にして考えると、形の六義と八相通を伝授された本が第二類本ではないかと推定される。

八相通は先に考えた㋠が該当するであろう。しかし、形の六義となると若干の問題がある。即ち、為顕流では「玉伝集知歌最頂」において、〝形の六義とは一首の歌に六義あり。四季恋雑の歌也〟として一首の中に四季恋雑を詠みこんだ歌を記している。これによる限り、㋠の如く風賦比興雅頌を一首に詠みこんでも形の六義とは云いえないのである。ところが「玉伝集和歌最頂」は、是に続いて〝如此一首の歌に六の形あるは、形の六義と云也。性の六義、体の六義、六首に名別也。形の六義は一首に在〟と記している。これによれば、一首の歌で六義を説明できればよいと云う事になり、四季恋雑に限定されないようである。つまり、風賦比興雅頌を各々一首ずつ六首で説明すると性の六義になり、風賦比興雅頌が一首の歌の中にあれば、形の六義と称するが出来ると云うのであろう。この諒解の下に「玉伝深秘」の中で六義を一首に詠みこんだ歌が説かれたものと考えられる。

このように右の解釈が正しければ、形の六義は正に㋠に該当する事になる。さて、ここまでくると、先の㋣の記述は一層精彩を帯びてくる。即ち、第二類本には為顕流の重要な秘伝が伝授されたのであるから、それを深く秘すべしと説くのは当然である。それ故に又、第一類本の如く家隆に関する記述は不適当となる故に削除され、㋦の如き跋文を付して一般権威化されたのであろう。そして猶、形の六義や八相通許りでなく、赤人、人丸をめぐる重要な秘伝等をも併せ伝授する事により、家隆流は益々強く為顕流の中に吸引

されるのである。

曽て定家と並び称せられた雄、家隆も、その末流に至ると、為顕流の傘下で漸くに、その名を留め得たに過ぎなかったのである。

「和歌知顕集」「和歌口伝抄」「和歌灌頂次第秘密抄」をめぐって考察される結論は、右の言の中に尽きるであろう。

だが、問題はまだ多々ある。本稿では特に流派意識、そのあり方などの点にのみ焦点をあててきた為に、右の三書の具体的な内容、意味についての言及が欠脱した（註九）。それを更に文芸精神史として描く事が私の念願である。それを他日発表する事を約束してとりあえず本稿の筆をおく事にする。

（註）

一、この事は拙稿「鎌倉時代後期成立の古今和歌集序註について（中）」（「文車」第十七・十八合併号）において述べた。

二、註一の論文参照

三、この書の大様は阿蘇瑞枝氏の論文が詳しい。「『人丸秘密抄』の背景」（「文学・語学」第四六号）

但し、その古今伝授との関連で述べられている事は、為顕流関係書を整理することで、もっと明瞭になり、更に論ずべきことも多い。他日、稿を改めて発表したい。

四、為類流の書「玉伝深秘」も同じ。そこでは赤人の〝和歌の浦に〟の歌も六義をこめていると説明している。

又、為顕流に近いかと思われる「社頭風伝集」（神宮文庫本「古今秘歌集阿古根伝」中にあるもの）でも、〝ほのぼのと〟の歌は六義を備へたものと説いている。

五、この書の詳細については他日論稿を発表するが、その内容、諸伝本の様相について簡単に記しておく。

その内容は、上・中・下の三巻に別れている。上巻は七箇ノ大事、十箇ノ大事、古今相伝灌頂次第、中巻は物名三箇、三鳥口伝、作者三種、五種の人丸、業平中将の事、猿丸太夫の事、古今歌数、口伝有歌四首、下巻はほのぼのと、思ひ出るの二首の伝、伊勢物語口伝次第として五箇ノ秘伝が語られている。

諸伝本は未調査のものが多いが、調査を完了したものだけでも次の類別ができる。

第一類第一系

書陵部a本・同b本・祐徳神社文庫本・静嘉堂文庫本

第一類第二系

京都府立総合資料館本・九大図書館本

第一類第三系

書陵部c本・東北大図書館本

第二類

天理図書館本・京大図書館本・上田市立図書館本

右の中、静嘉堂文庫本が室町中期の写本で最も古い。又、奥書は、天理図書館本が、常縁よりの伝受書である旨の文明十八年宗祇の言を伝えるのが最も古い。

六、註一の論文参照

七、先にあげた「古今和歌灌頂口伝」では、五人の人丸を掲げている。

八、拙稿「竹園抄の成立に関する二、三の問題」（「名古屋大学国語国文学」第十二号）

九、為顕流の書「和歌古今灌頂巻」（神宮文庫蔵）は「和歌灌頂伝」や「和歌灌頂次第秘密抄」の書が和歌を仏説で教く事顕著なる事の基になった書として重要である。この事は為相流の灌頂伝授の書「古今和歌集灌頂巻」の主要部分は「和歌古今灌頂巻」の論を適当にアレンジしたにすぎないという事からも云いうる。

又、「和歌古今灌頂巻」は三条西家本系「和歌知顕集」の序論の巻頭及び和歌六体論に、そっくり引用されている。これは「和歌知顕集」が

為顕流の書である事の一証左となる。
以上の事は、他日、稿を改めたい。

翻　刻

「和歌灌頂次第秘密抄」（静嘉堂文庫蔵）

凡例・解題

。「和歌灌頂次第秘密抄」の諸本の第一類本中、奥書年号が最も古く且つ善本と思われる静嘉堂文庫本を、出来る限り原本に忠実に翻刻した。
。文字は印刷の都合上、すべて現行の字体に変えた。又、梵字は（梵字）と表記した。
。丁替り毎に」印を付し、その表に当る部分には、五オの如く記した。
。読解の便宜を考え、句読点の入るべき部分を一字空白とした。
。該本は全葉墨付で十七丁ある。縦二十五・八糎、横二十・三糎の大きさで、表紙は近代のものである。「静嘉堂蔵書」「聴応軒蔵」の二の印記が第一丁表にある。奥書には、延文二年の景阿の花押があるが、本文の字体はもう少し新しく感ぜられ書写年時は室町末期位に下るのではないかと思われる。

和謌灌頂次第秘密抄

二位家隆卿撰

それ和哥ハあまつ神の御代よりつたハりて　人の世のもてあそひたりといふ事ハ　むかしいさなきいさなミ二のみこと　天のうきハしにて夫となり女となりしよりはしまる也　いさなきいさなミのふ

たりのみこと　たかひに哥をよミてかたらひよりて　とつきをしてはしめて日神をうミ給ふ　ひるをてらし給ふ也　次月神をうミてよるをてらし給ふ　これよりよるひるのさかいあらハれぬ　次ひるこをうミ給ふ　次素盞烏尊をうミ給ふ　日神と申はいまのいせ天照大神にてわたらせ給ふ也　天照大神日本国のあるしにて御代をまもり」一オ
たまふ　時に四はんめの御とゝ　そさのをのをのみこと　御あにの天照大神の御後見にておハしましけるか　中をたかひて出雲国ひの川かみへなかされてわたらせ給ふに　その所に尾かしら八ある大蛇としく〳〵に人をとりくひけるに　あしなつちてなつちとて二人のけす神あり　めをとにていなたひめといふむすめあり　この大蛇にすめのいなたひめくハるへきにて　おやなきかなしミけるに　そさのをの尊あはれミて　なんちひめを我にえさせよ　しからハ大蛇をほろほさんとて　はかりことをもて大蛇をうち　つた〳〵にきり給ふ　さてかのいなたひめのいのちをたすけて　みことひめをとりて宮をつくり　ひとつ所にすミ給ふ　時にみこと哥をよミ」給ふ也　むかし神代の哥ハもんしもさたまらす　句もとゝのをらす我はしめてもんしをさためてよまんとて三十一字に五句をさためてよミ給ふ

やくもたついつもやえかきつまこめに
やえかきつくるそのやえかきを

やくもたつ
八色の雲たつといふ心也　これハ大しやのうへにたつ雲の事な

り
いつもやえかき
　これハ大しやをうちていつまてもめてたくあるへきといふ心なり
つまこめに
　これハいなたひめをこのうちにこめてをくといふ事なり
やえかきつくる
　これハひめを八重かきのうちにをきたれハ　まゐんのおそれもなしといふ心なり
そのやえかきを
　これハやえかきをやふるものはあるましきといふ心なり
文字を三十一字にさため給ふ事ハ　仏の三十二相にあて給ふなり
もんしハ　三十一字也　三十二相に」オ二
一相たらぬハ三十一字にたうりをあらハす心をくはへて三十二相にあて給ふなり　五七五のはしめの五文字　人の五行なり　五行とハ木火土金水これなり　中の七は天神七代にあて　をハりの五ハ神代の地神五代にあて　七七は七難即滅七福即生の心なり　その五句と申ハわれ〳〵か五大なり

やくもたつ	地	五	五行木火土金水	骨肉(ホネシシムラ)
いつもやえかき	水	七	天神七代	身ノ内ノ血
つまこめに	火	五	地神五代	身暖気(ダンキ)
やえかきつくる	風	七	七難即滅	身気(イキ)
そのやえかきを	空	七	七福即生	身心

そさのをの尊ハ権化の神にてわたらせ給へハ　この仏心」のすかたをもて三十一字五七五七七の五句にさためてよミ給ふ　三十一字の和哥のはしめなれハ　この哥を和哥のちゝとす　されハこの心をえて三十一字の五句ニよミてたうりをあらハすハ　仏をつくる　われらをつくる　せかいをつくるにおなしきゆへに　一首のうたニハ仏もあハれミをたれ　神もなうしうある也
　人王の代となりて左大臣葛城と申人　ミちのくのかミになりて奥州へくたられけるに　ミちのくのあさかのこほりにて　民ともまうけわろくしたりとて　はらたゝれけれハ　つきまいらせたりける女房に　あふミのさいによと申けるうねへ　大臣の心をとらんとてよミたり」オ三
あさかやま
　これハその所の名也
かけさへ見ゆる
　これハやまのしけきかけなれ共　大臣の心あさく見ゆるとなり
やまの井の
　これハそれに山の井あるによてよめる也
あさくは人を
　これハ大臣をおろそかにハおもハすとなり
おもふものかハ
　これハおもハんするハいかにといふ心なり
これハ大臣ほとの人の　民にむかいてはらたつハ　心あさくこそお

ほゆれといふ心をよミける也　これによて大臣心とけてはらたゝすなりけり

やくもの哥ハ神の御哥なれハ　三十一字の和哥のはしめ　これを謌のちゝとす　又いまのあさか山の哥ハ和歌のはゝとす　されハ古今の序にも　やくもあさかの哥をちゝはゝのやうにかゝれたる也　この二首をお」ほえて毎日あさことにゑいすへき也

両界

金剛界大日如来
　やくもたついつもやえかきつまこめに
　やえかきつくるそのやえかきを

胎蔵界大日如来
　あさか山かけさへミゆる山の井の
　あさくは人をおもふおもふ（マヽ）ものかハ」オ四

夫和哥ハ胎金両部天地陰陽の二儀をくそくして世界衆生仏心の妙意をよミあらハして　如来の三十二相をつくるゆへに　くとくとなりて現世もあんをんに後生もうたかいなくわうしやうするゆへに我朝の御法とす　されハ玉のすたれのうちより柴のあミとのかたハらまでもよめとすゝむるハ　仏になるへきなかたちたるによて也　これハ日本の風躰也　唐土ニハ詩をつくりて　我朝の哥にもちいるゆへに　古今ニハからの哥かくそありけるといふ　毛詩と申詩のこと也　この詩にハ六義とてむつのきをつくりいるゝ也　これを仁王十五代の御門神宮皇后の御時　新羅国より王仁と申ける臣下　毛詩の

六義をつたへてきて」我朝の謌の六義とす　仁王十七代の御門　仁徳天王と申ける時の王いまた　難波津宮と申けるに　位をゆつり給しに　位をしらてつかしとの給けるに王仁申ていはく　王子はや位につかせ給へといふ事をなにはつの梅によそへてよミけるに六義あり　哥にいはく

風　なにハつに
　なにはの宮ハや位につかせ給へ

賦　さくやこの花
　むめハとくさく花なれハ　この花のことく

比　冬こもり
　としのうちよりたにもさくそかし

興　いまははるへと
　ましてはるへになりて　さかぬ花やあるへき

雅　さくやこのはな
　いまハあんすへき人もなし　はやくらいにつき給へといさめ申心なり

頌　」オ五

此哥はしめてりくきをこめてよめる也　六義の和歌のはしめこれなり

風　南
賦　無
比　阿
興　弥

雅　陀
頌　仏

この六義を一首にあてゝハなをこゝろえかたけれハ　六首の哥にあてゝ六のすかたによむへきやう

一ニ風

これハそへ哥といふ也　風といふもんしをそへてとよむ也　本哥にいはく

なにはつにさくやこの花冬こもり」
いまははるへとさくやこのはな

この哥を風の哥といふ　なにゝてもすくにいふへき事をものにたとへてよむを風のうたといふ也　これハなにはつの宮はや位につかせ給へといふ事を　難波津の梅によそへてよむゆへに風の哥といふ也　風ハ木草によりてふくハしらるゝゆへに　すくニいふへきことを梅の木によそへてよむゆへに　風哥とハいふ也

二　賦

これハかそへ哥といふなり　本哥にいはく

さく花におもひつくミのあちきなく
身にいたつきのいるもしらすて

これも風の哥のやうに　すくにいふへき事を一首の言ニ」オ六くはりわたして　うへを花月によめとも　そこの心ハ御法のふかき心をよむ也　さく花におもひつくといふは　一たんのミやうりの花におもひつきて　まことの道のしるへをわすれけるといふ也　身にいたつきのいるもしらすてとハ　我身のほんなうのくもにおほわるゝもしらすといふ心なり　ほんなうとかきていたつきとよむなり　いたつきにあまたのもんしあり　くるしきとかきていたつきとよむなり　労とかきてもいたつきとよむなり　これにてよく〳〵心うへし

三　比

これハならへ哥といふなり　本哥にいはく

きミかけさあしたのしものをきていなハ」
恋しきことにきえやわたらん

これハなにゝてもふせいを二たくミて　これハとゝまれハあれハゆくといふやうに　ふせいをとりなしてよむを　ならへ哥といふなり

四　興

これハなそらへ哥といふなり　本哥ニいはく

我恋はよむともつきしありそうミの
はまのまさこハよミつくすとも

これハならへ哥のやうに　これよりもかれハなを大事なるになといふやうによむなり　これにて心うへし

五　雅

これハたゝこと哥といふなり　本哥ニいはく」オ七

いつハりのなきよなりせハいかはかり
人のことのはうれしからまし

これハふせいをかさらすして　さしことによむ也　ことなるきなし

六　頌

これハゆはひ哥といふなり　本哥にいはく
このとのハむへもとミけりさきくさの
みつはよつはにとのつくりせり
むへもとミけりとハたうりをしる人のいゑハさかふるといふ心なり
むへハ道理なり　さき草とハさいはいくさといふなり　ミつはよつ
はとハ三むね四むねに家をつくるといふ本文の心なり　後漢書曰」
楊貴姫依有天朝之愛　楊国忠到星林之位　家栄三棟四棟なりといへ
り
六義これにて心へよむへき也
次八品と申事あり　八のしな也
混本哥
神代の和哥　もんしさたまらす
返哥
古今等　和哥指也
長哥
むかしハ三十一字哥　いまハしからす
短哥
いまの長哥なり　むかしハ短哥とこれを云也
旋頭哥
いまハこれなし
俳諧哥
これハたゝこと哥
廻文哥

いまハこれなし
猿尾哥
これハ二十七もんしにてよミしなり　これもいまハなし
混本哥と申ハ神代の和哥也　その哥にいはく
あまなつけいそなつけしておほやそしまやかいまミそめてちきり
ハしめき
此哥あまなつけとハいさなき　いそなつけとハいさなミの」オ八
御事也　おほやそしまやとハ日本の名也　かいまミそめてとハとつ
きをいふなり
むかしより和哥ありてもてあそふといへとも　ことにひろまる事
ハ　持統文武二代のみことよりひろまる也　そのゆへハ人丸と申歌
仙出雲国より出生して　この二代のみことの和哥の師はんにまいら
せ給ふ時　文武和哥の心をえさせ給て　尊ハ吉野山のさくらを雲と
御らんし　人丸ハ立田山の紅葉をにしきとなかめ給ひしより花の雲
紅葉の錦とよめる也　又赤人といふ人上総国より出生して人丸にあ
ひ　おなしくひろめ給ふ　この時　文武御子聖武皇帝の御宇也　聖
武ハならのミかと」
のはしめなり　此御時にはしめて万葉集と申集をあつめさせ給ふ
その時の撰者
橘諸兄左大臣　伴家持大納言
この両人うけ給て撰す　三千首それをはしめて彼の帝平城天皇まて
せんしあつめさせ給てをかれし　いまの万葉集これなり　この平城
よりして十代ありて古今集をせんしをかせ給ひしを延喜帝と申也

其十代と申ハ
平城天皇　嵯峨天皇
淳和天皇　仁明天皇
文徳天皇　清和天皇　業平ハ文徳清和二代臣也
陽成天皇　光孝天皇」ォ九
宇多天皇　醍醐天皇　延喜御事也

この延喜帝と申ハ神武よりこのかた第一の賢王にてわたらせ給けるあひた　民のうれへもなくかまとにきハひて　たかき屋までもたのしミのけふりたゆる事なかりしミことにてわたらせ給けるあひた　よのすゑもよかるへき事をハなをすゝめ　ゆくすゑあしかるへき事をハすてさせ給ける中に　和哥まつりことのたすけになるのミならす　ほとけになるへきなかたち也　君臣の情もこれよりしやうし国中もやすかるへきとおほしめしけるによりて　万葉にのこるむかしの和哥　我御代の和哥あつめて　千首二十巻にさためて古今和謌集とす　これを天下ニおもきたからと」してもてあそふなり　和哥の祖師人丸赤人のミ也　中にも人丸のうへなき歌仙にて　もちいる哥そのかすありといへとも　ほの〳〵の哥人丸一期の中の正哥　自性法身の妙意をよミあらハし給ふ　真俗二たいをかねたるわかたるによりて　延喜もこれを我集にいれさせ給ふ　このほの〳〵の哥を人丸よミ給ふ事ハ　主君高市王にをくれまいらせ給てのち　うき世の無常を観し給て　播州あかしの浦に世をのかれて　うらふく風にうそふきて　松の嵐きしうつなミに心をすまし　ゑしまかいその月をともとしてあかしくらし給ふ時に　高市の王のわかれを海路の旅によそへてよミ給ふ　これに五義をよミいれける也」ォ十

ほの〳〵と
　これハ高市のわうのいてき給へるはしめ　ほの〳〵とあさ日のいつることしといふ心なり
あかしの浦の
　これハまつりことのあきらかなる事　あかしうらの月のことしといふ心なり
あさきりに
　これハかやうにめてたき人なれとも　むしやうのきりにおかされて御かくれあり　くらきみちにおもむき給ふ心也
しまかくれ行
　これハしなせ給て　しての山へかくれゆかせ給ふといふ心なり
船をしそおもふ
　きミハ船　臣ハ水なれハ　君の船しつミゆかせ給へるを　臣の水なこりおしとおもふといふ心なり

これ哥のおもてハ海路の旅のていに　むしやうのありさまをよませ給ふと見えたり　されともふかき心あるへし

ほの〳〵と	東	春	阿仏	妙（梵字）」
あかしの浦の	南	夏	宝生仏	法（梵字）
あさきりに	西	秋	無量寿仏	蓮（梵字）
嶋かくれ行	北	冬	尺加牟尼仏	花（梵字）
船をしそ思ふ	中	々	大日如来	経（梵字）

これによりて和哥を心にかけん人ハ　毎日三反つゝ人丸のほの〳〵の哥をゐいして　五方五仏に廻向したてまつるへきなり　現世に和哥の心をうるのミならす　仏果にいたるへき事　うたかいをなすへからさる也　か様にわかハほとけなれとも　むかしより古今にいたるまて　うたのやまひをさらす　哥にやまいあれハ　ほと」オ十一けにやまひあるにゝたり　これを尤さるへき也　すミよし玉つしまこの二の神ハ神代の和哥祖師にてわたらせ給へる也　本地薬師如来にてわたらせ給へハ　うたをよまハやまひをさるへき也　本せいにあひかなハんかためなり　これによりてちかころの宗匠より　やまひをさる也

後白河院御宇

　定家　定隆（マヽ）

　有家　雅経

此四人より四病八病をさり給ふ　十二の病の祖師」

すミよしの明神の御心にかなハんかために　さるところなり

一　岸樹病の哥

　しくれしてしつくもいたくもる山は

　したはのこらす紅葉しにけり

　　これハはしめの五もしのかしらと　つきの七もしのはしめの

　　もんしをきらふなり

一　浪船病の哥

　わかれぬる人をあひ見るうれしさも

　せんかたもなきおもひなりけり

　　これハはしめの五もしのおハりのると　つきの七もしのおハりのるとおなし　これをきらふなり

一　風燭病の哥

　たのもしき人もなきさに袖ぬれて

　おつるなミたに道まよふなり

　　これハ上の句の中の七もしのおハりのにと　下の句の」オ十二はしめの七もしのおハりのにとをきらふなり

一　落花病の哥

　ちりぬれハのちハあくたとなる花を

　おもひしらすもまとふてふかな

　　これハはしめの五もしのおハりのハと　つきの七もしの三めのハとおなしこゑをきらふなり

一　胸尾病哥

　さくらちる木の下かせハさむからて

　そらにしられぬ雪そふりける

　　これハはしめの五もしおハりのると　七七のおハりのるとおなし　これをきらふなり

一　声音病哥

　わすれつゝしかのふる道まよひきて

　関にこよひハたひねするそて

　　これハ上句のおハりのてもんしと　下の句のおハりのてもしをきらふなり」

一　同語病哥

するかなるたこのうらなミたゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日そなき
これハ上下にあるおなし字をきらふなり　たゝぬ日とこひぬ日とおなし　これをもて心うへし

一　同心病哥
もかり船いまそなきさによするなる
みきはのたつのこゑさハくなり
これハ上句になきさといひて　又下の句にミきはのといへるをきらふなり

一　清濁病哥
なとや身ののかれるのかれハてゝまた
この秋も見るふるさとの月
これハすミにこりによて　たうり二かたへゆく　これをきらふなり」オ十三

一　声聞病哥
ミやまには松の雪たにきえなくに
ミやこはのへのわかなつむなり
これハ上句のはしめのミと　下句のはしめのミとおなし　これをきらふなり

一　被計乱病哥
あふまてとせめていのちのおしけれハ
恋こそ人のいのちなりけれ

これハ上下にけれと二あるをきらふなり　けれ〳〵ともあらハこれにおなしくきらふ也

一　後悔病
これハ哥をよミてのちにあそこかわろきこゝかわろきとおもひて　よミなをさハやとおもふ心のあくるをきらふ也」

はしめの和哥の父母のことはり　六義八品四八十二の病をさるまてしたいたかハす　これを心えぬれハ人におしへてすなをに哥をよまするなり　これ人のためなり　哥をよむ事よく〳〵心をしつめてあんすへき也　爰五義三躰といふ和哥の秘密あり　むかしより一人につたへもてきて二人しる人なし　されとも心さしふかゝらん人にハ　きしやう七まいをかゝせて飲食衣服幷金銀瑠璃等の六種の珍宝を　すミよし玉津嶋にたてまつりてつたふへき也　おろかにしてこれをつたふる事なかれ　但きりやうたりといふとも　この五義におきてハ凡下ニゆめ〳〵さつくへからす　よく〳〵師をきゝ」オ十四やうしてうくへき也　其五義と申ハ　たとへハ郭公と云題にて

辺　さつきやミ
序　くらはし山の
題　ほとゝきす
曲　おほつかなくも
流　なきわたるかな

これにて心うへき也　なにゝても題をえてハはしめの五もんしに題をあらハす事あるへからす　はしめの五もしにハなにをいふやらんときこえて　五七の所にて題をあらハれねとも　あハれこれをいは

んするよとおほえて　五七五にて題をあらハして　おくの七へくとかせて」

おハりの七をいひなかすなり　たとへハ五月やミといふ時に　五月やミにハなにをかいはんするやらんとおほえてある時ニ　くらハし山といふ時ニくらハし山ハほとゝきすのすむ山なれハ　ほとゝきすをいはんするよとおほえて　ほとゝきすとあらハしておほつかなくもとくときて　なきわたるかなといひなかすなり　なにゝてもこのほとゝきすの哥のやうにたくミて　題を五七五の所にてあらハしてよめハ　四八十二六義のことハり　こしおれもよりつかすよまるゝゆへに　さうなく人におしへす　これをたやすくおしうれハ道かろくなるゆへに　すミよし玉津嶋ひし給ふところなり　子にても弟子にても一人よりほかハつたふへからす　このむねを」十五オ そむかハ住吉玉津嶋の神意にたちまちそむくへし　深か中の深秘か中の極秘なり　穴賢

次三躰と申ハ秘哥一首に三のすかたある也　三のすかたと申ハ一ニハけたかく　二ニハやさしく　三ニハ心をふかくよむなり　その本哥にいはく

よそにのミ見てややミなんかつらきの
たかまの山のミねのしら雲

これにて心うへし

和哥と連歌とのかハりめは　和哥ハ上下両句をいひつゝけてたうりをあらハす　連歌ハ上下両句に道理二あるなり　これによりて連歌と哥とハかハる也　連歌うたといひてこしおれなり　和哥」

こしおれと申ハ上下に道理二あるをいふ也　その本哥にいはく

わか恋は松をしくれのそめかねて
まくすかハらに風さハくなり

このうた我恋は松をしくれのそめかねてとはかりにても　たうりしこくきこゆ　又まくすかはらに風さはくなりといふはかりにてもたうりきこえたり　これハ慈鎮の名哥なれとも　こしおれの本哥なり　所詮当世の和哥の風躰五七五の所にて題をあらハして七々にて道理をきこえさするを　上下にひきわけてよミて見れハ　いつれもたうりきこえすして　あハせてよミつゝくれハたうりのさハ」十六オ さハときこゆるやうによむ　これを当世の風躰とする也

一　当世の躰　其本哥にいはく

山路雪といふ題にて

これまてはふらさりけりとたひ人の
いふに山路の雪そしくるゝ

秋風といふ題にて

ふる寺の庭のはせうのひとつはを
あまたになれと秋かせそふく

秋感涙

露をこそいかにもふかめおきのはに
をかぬなミたをさそふあきかせ」

これを当世の風躰としてよむへき也

家隆方一流相伝

御堂関白道長
宇治関白長家
二位家隆　　顕輔皇太后宮大夫
九条二位　　行家卿
九条二位　　僧都源家
九条大夫　　律師房家」十七オ

延文二年正月廿五日　沙弥景阿（花押）」十七ウ